

三 公用族追放

さき頃「社用族」とか、「三等重役」とかいう言葉が流行していたが、これと相前後して「公用族」とか「組合族」という言葉が人口に流布され始めた。もとより何れもよい言葉ではない。特殊の体臭がこもったいやな言葉である。私は、社用族とか公用族とかいう言葉のもった体臭が、戦後の日本の病弊を象徴しているように思われて、耐えられぬ気持がする。何もこれは独り日本だけの病弊ではなく世界的の通弊であるようである。アメリカにおいても、税金が高いので（法人所得税五二パーセント、超過利得税三〇パーセント）会社の経費で接待し自分もこれに乗する「社用族」がばつこしているとのことである。そういう税制では一ドル使つても会社の負担はその六分の一強とかになるにすぎない。社用族等一連の呼称を受ける人々は、自分の力で現在享受している生活を営む力がないのに、会社とか役所とか組合とかにぶらさがつてその分を越えた生活を享受していると目される人種である。自分の力以上の生活を何か自分の属する社会に依存して享受するものである。そこで看過してはならないことは、「自己責任」という觀念の欠如で

ある。人前をはばかり、おどおどした態度で斯様な生活の片割れにありついている間は、まだしも哀れではあるが可愛いところがないと謂えない。ところが、近頃は白昼公然とこの種の群が、吾物顔に横行しているのは唖然たらざるを得ない。世間もまた「世の中はこんなものだ」ときめこんで別に不思議とも考えず、無感覚になつてしまつてゐるが、これでは大変なことになる。

民主主義というのは、健全な個人のあるところに育つものである。緊張した自己責任感の溢れるところに発展するものである。他にぶらさがつてゐる個人が充満してゐるところでは、本当に責任をもつて発言権と主体性を確保してゐるものは会社とか役所とかである。いわばこういう社会ではコレクティブイズムが歩いてゐるわけである。ところが歴史を読んで見ても真に尊いもの真に価値ある文化を生み出したものは、真に自覚した個であつて集団ではなかつた。個が本當の個に選つた時に、その個を通して集団が生氣を呼びもどし、その社会に筋金がいるのであつて、個が自らの独立と主体性を喪失した時には、その個はもとより集団も空しく死を俟つ許りになつてくるわけである。

われわれは日本の民主主義の成長をこい願ひ、日本社会の健全な躍進を希望するが、そのためにはわれわれは先ずこの社用族や公用族の追放から始めなければならぬ。ところが、そうてつ取り早くこの社用族や公用族の追放が出来るわけのものでは決してない。人間である以上、誰も

すきこのんで社用族や公用族になり下りたい者はいないのである。社会人としてそれ相当の責任と体面が維持できる場合には、そういう人種になりたくないのが人情であろう。そこで私は、会社でも役所でも、第一に給与をできる丈多くするように心懸けなければいけないと思う。そうしておけば社用族、公用族の追放に抜本的な手を打つても、これは大方の納得が得られると思う。給与を増すために、公私を問わず各団体は、蠻勇を奮つてその財政の刷新を図るべきだ。給料を出すことを損失だと思つるのは野暮な話だ。給料を増すことによつて会社や役所に仕事の渋滞がない許りか、責任感の弛緩を回避できることになるわけである。そして又、その勇断から日本の民主主義は生々と発展する素地が造られるし、日本の財政の刷新を招来することもできるものと確信する。

又税金をできるだけ減らさなければならぬ。稼いでも稼いでも税金にもつて行かれるようでは、社用族や公用族はどうしても生れる。減税がこの種の害悪追放の一大要件であることも銘記すべきである。(昭、二八・八)

四 お金の魔力

俗に「地獄の沙汰も金次第」と言われる。よく世知辛い世相とお金の力との因果関係を現わし得て妙である。お金があれば何でも買えるという。衣食住に必要なものはおろか名画も買えるし、深山幽谷の美も觀賞できるし、時に貞操さえ奪うことができる。おそろしいのはお金の力ではある。何でも買えるから貨幣論という学問では、お金のことを一般的購買力というのである。

私はこのお金の力の偉大さをこういう風に考えてみたい。それは異質の物を等質のものに変えてしまふ力である。質を量に換算してしまふ魔力である。早い話がここにある万年筆と本とは何の関係もない全く異質の存在であるが、万年筆は千円で本は二百五十円であると決めてしまふ。つまりこの万年筆はこの本の四倍であると決めてしまふ。名画と精密機械とはそれこそ何の関りもないのであるが、一度お金という魔力にかかれば、これは 円これは 円だという風に同じ平面の算術に割り切ってしまう。このことは静かに考えると驚くべきことである。人類にとつて偉大な発明である。かくて一切の森羅万象がお金の魔力にかかると、これはいくらくらくと相

場がきめられてしまう。しかも全世界の人々が古今東西を問わず毎日嘗々として、このお金の神様に跪坐しつつ苦闘を重ねてきたし又重ねつつあるのである。史家は現代という時代の特長を經濟だとみて、現代を經濟時代と呼んでいる。しからばこの經濟の根本を支え、その運行を確保しているお金は正に現代人の神である。まことに靈驗あらたかな神である。近頃では正真正銘の神様までがこの新しい鬼神に額づいてゐる有様である。

ところがこのお金という神様は随分間抜けたところがあるから面白い。森羅万象を一つの数字に焼き直す程の神通力をもっていないながら、自分自身の価値を決めることができなない代物である。米一石が九千円だときめてしまえば挺子でも動かない神様であればよいが、暫くするといや今度は一万円だと決められる。随分融通は効くが間が抜けているではないか。昔一円で買ったものが今では三百円でござると来る。何のことだかガツカリするではないか。

財 政 断 想

これでは折角働いて蓄積した大事なお金も当てにならない。今のうちに使っておこうということになりかねない。つまりインフレーションという嵐には風邪をひき易い體質をもっておられるのがこの神様である。そしてインフレーションを起すか起さないかという手品の一切は、か弱い人聞の手に委ねられてゐるわけである。換言すれば政治がお金の値打をきめる大きい責任を負わされてゐるのだ。このことはよく考えてみれば大変なことである。政治とりわけ財政という仕事

は恐ろしい魔力をもった神の使い手であるわけである。

通貨価値の維持ということは一口にいつてしまえば何でもないが、その通貨の流通する地域の森羅万象の貨幣価値的構造を維持するという大きい仕事であり、政治の中にあつて一番全局的な一番大きい役割でもある。それは、経済の消長を左右するのみならず、道義の根底を揺さぶり、人の運命をもてあそび、喜怒哀楽を自由にする恐ろしい魔術である。

財政家たるものはこの事実をよく認識し、絶えず襟を正し、齋戒以て事に臨まなければならぬ聖職を預っているものである。如何に精進するも尚足りない仕事である。(昭、二八・八)